

デ ジ タ ル 放 送 研 究 会
第 8 回 勉 強 会

平成 17 年 9 月 18 日

藤 吉： それでは勉強会を始めたいと思います。今日は、午前中はNHK マルチメディア局の兄部さんを講師としてお招きしています。わざわざ休日に来ていただいたうえに、なんと兄部さんのお部屋をお借りするということになりまして、こちらへおじゃましております。兄部さんは前任地、名古屋の放送局で、愛知万博のデジタル放送を使った実験的な放送なんですか、あれは？

兄 部： 本放送でございました。

藤 吉： 本放送ですか。その準備の段階で大変苦労されたということで、どういう仕掛けで、どんなことができるようになってるのかというようなことを中心に、お話を聞かせていただこうと思っております。兄部さんは、小田さんとか私らと同じNHK 社会部のご出身ですけども、こういう仕事に先鞭を付けておられます。それじゃ、兄部さん、よろしく願います。

兄 部： 兄部でございます。よろしく願います。今、ご紹介いただきましたちょっと変わった、アニベと書いて、変わった名前でございますが。座らせていただきます。小田さんは、まさに私にとっては入ったときの怖い事件デスクでありまして、私は災害のほうをほとんど仕事をするのがなかったものですから、藤吉さんの警咳にあまり接することはなかったんですが、簡単に略歴だけ申します。私は77年にNHKに入りまして、地震の多かった釧路が振り出しでございます。それから私、93年、平成5年に札幌のニュースデスクでまいりまして、行って2週間後に北海道南西沖地震に直面しました。7月12日の深夜に地震が起きたんですが、13日の昼のニュースと、それから夜の7時のニュースは、実は私が現場に駆けつける時のヘリコプターからのリポートが放送されました。私、青苗という非常に津波を受けて燃えた地区に最初に前線デスクとして入ったものですから、ほとんどテレビを見ることなく、ひたすら取材と、それから車をとにかく借りて奥尻島西側の海岸で、東大の、当時都司先生、助教授でいらっしゃいましたけど、都司先生を連れて行って、高さ10メートル、島の方々から聞いて行って、聞いたあとでも、うそだろうと本当に思ったんですが、電線から海草がぶらさがって、水がしたたり落ちておりました。そういう現場に行き、それから2年後ですか、阪神大震災の現場にも応援に行き、というふうなことで、地震取材を専門にはしていないんですが、そういう取材経験がいくつかございます。

今日申し上げる話のきっかけは、2003年の12月から東名阪で地上デジタル放送が始まった際に遡ります。名古屋放送局長の指示でチームをつくり、報道からは私が出て、とにかくどのようなデータ放送をつくることができるか検討をいたしました。名古屋地区の場合は、東海地震の想定震源域が西に広がって、大都市圏で初めて強化地域に入るといふようなことがあって、非常に地震に対して地域の方々の関心が強くなってきたというところがございまして、そういう部分を踏まえて、どういうデータ放送をやっておこうかというようなことを、考えました。

名古屋ではじめに考えたのは、暮らしに役立つ、操作が簡単、地上デジタル放送は基本的には県域放送がベースでございまして、そういう意味では地域のサービス、詳細な情報が提供できるということで、地域サービスにも役立つという、三つの狙いがありました。87の市町村、それから名古屋市の区が16ございましたので、103の市区町村の情報をとにかく集めようということで、私ども5人の兼務者で、営業活動といいますが、私自身30数か所の市町村を回りにまして、情報を提供してくださいとお願いに回りました。

その際に申し上げたのは、デジタル情報を活用しましょう、ということでした。というのは、皆さんパソコンの中で情報をお持ちなのに、わざわざそれをプリントアウトしてファックスにして、それをまた手打ちにするというのは、実にばかばかしいではないか。情報をテキストデータにしてメールで送っていただけると、われわれはそれをコピーアンドペースト、あるいはカットアンドペーストでできる、そういうことをお願いしたい。それから仕組みとして災害情報に役立つために、普段使っていないものを3年に一遍か5年に一遍ということでは、いざ災害が起きたときに使えない可能性があるので、ぜひ災害情報と普段の広報ルートを一緒にしてほしい。そういう提案を各市町村の担当者にいたしました。さらにこのデータ放送が後々インターネットに接続されていけば、電子自治体へのゲートウェイにもなるではないか。データの作り方を上手く工夫すれば広報誌にも、地上デジタル放送だけじゃなくて、記者発表資料にもマルチユースができるじゃないかと、何かそこをやりましょうよというお話を市町村の皆さんに申し上げましたが、実際にはデジタル放送自体の視聴経験がない。当時、2003年7月のお話ですから、地上デジタル放送そのものは始まってなかったんですけど、BSのデジタル放送もほとんど見たことがない。データ放送って何よっていうふうな感じでのお話でございました。それから庁内、役場内のIT化も非常に遅れていて、国は今U-ジャパン(=ユビキタスジャパン)という政策を推進していますが、地方自治体の末端では電子自治体って何っていうふうな形で、何でNHKのためにそんな仕事をしなければいけないのかと、なかなかご理解を得られなかったというのが、当時の現実でした。

名古屋放送局のデータ放送を後ほどご覧いただきますが、「暮らし・安全ネット」というのは、休日夜間の診療所情報と、避難所の情報、くらしの防災情報、あなたの街からという、こういうふうな四つのカテゴリーになってございます。郵便番号を設定しておく、自分の住んでるところのページが自動的に最初に立ち上がってきて、休日・夜間、避難所、くらしの防災情報、あなたの街からという情報の、いわばポータルサイトになっているというのが特徴です。中でも「避難所の情報」については、それぞれの自治体の防災の担当者から年に1~2回程度データを送ってもらいます。「あなたの街」からというのは1ページ分ですけども、

いわゆる広報ページとして、各市町村の広報から市民へのお知らせなどをメールを使って送って頂いています。災害時にはこのページが、避難勧告や避難指示などを伝えるページとして機能するという考え方です。情報の経路としては、自治体からメールで飛んできたものを、名古屋放送局の入力端末で編集をして、データ放送としてお伝えしています。

ところが、このメールを利用する方法も確かに間違いが少ないし、作業は簡便ですが、これをやっている自治体とNHKが1対1のやりとりになって、自治体の担当者もNHKに1回1回メールを投げなきゃいけない。NHKも103の自治体があるわけですが、103個から飛んできていちいち処理をしなければいけない。これはかなり面倒だということに双方気がついてきました。またNHK以外にも、CBC、それから東海テレビ、中京テレビ、名古屋テレビ、テレビ愛知と全部それぞれフォーマットがあるのではやってられないぞっていうお話が自治体側からもあって、そこをどう解決するか。災害時にも1対1の関係をやってたらとても成り立たないもんですから、できれば1対マルチというふうなことにできないだろうかという、新しい考え方が生まれてきました。そうした議論に当初から積極的にかかわっていただいたのが、名古屋のデジタルタワーのある瀬戸市、それから東海テレビ、皆さんご存じかもしれませんが2000年9月の東海豪雨の際に、ホームページ、インターネットでもさまざまな有用な情報を流し続けた、そういう実績を持つテレビ局ですが、その瀬戸市、東海テレビと一緒に、何かやり口がないだろうかということで模索をしておりました。瀬戸市に簡単なサーバーを置いて、3、4市の情報をその中に入れて、NHKと東海テレビがいただくというふうなことも始めました。そうしたデータ放送の情報共有システムの発展形として実現したのが、愛・地球博での試みです。まず博覧会協会にご相談して、民放各社にも呼びかけて、万博データ放送ワーキングというものをつくろうじゃないかということになり、さまざまな検討をして、万博TVCMLというものを、12月から1月ぐらいいかけてほぼ策定をして、それをメインにサーバーの設計等々を博覧会協会にお願いをして、実際に3月25日からの愛知博の中で始めたということでございます。

TVCMLっていうのは、今、申しました博覧会協会と放送事業者6社で策定した、テレビジョン・コモン・マークアップ・ランゲージの略でして、構造は、私、専門家じゃないので、あんまり詳細についてご説明する能力を持っておりませんが、基本的にはそれぞれ個別の記事を表現するTVCMLというものと、その記事がどのようなステータスにあるかということを定義付けられるようにした、TLMLという二つの文書から構成されます。NewsML、新聞協会で定められたNewsMLによく似た、というかそれをかなり援用した格好で構造はつくってありまして、ニュースアイテムとかニュースヘッドラインとかっていうようなタグを利用しながら、情報をどこにどういうふうな書き方をするっていうふうな、あらかじめタグの使

い方を決めておくことで、自動変換が可能になるってのが放送局にとってメリットですし、自治体では今回の場合、博覧会協会にとっては、XML の情報ですので、HTML との親和性がある。あるいはサーバーに置いていけば、今回の場合は放送事業者だけですけれども、いろんな方にも使ってもらえる。地域情報を共有できるツールとしても、今後、期待できるんだなというふうなところがあります。博覧会の情報に即して説明しますと、イベント、催事、パビリオン、交通アクセス等々の情報が、博覧会のサーバーに集まってまいります。これを TVCML のフォーマットに則って万博の公開サーバーにデータとして上げておいてもらえると、NHKをはじめ各社が自動的にデータを取得し、データ放送に反映させるという仕組みです。一方、エキスポ情報だけではなく、自治体からも 15 の市町村のイベント情報を、自治体のサーバーを通じてみんなで持っていくという仕組みにもしました。両方、TVCML で動いているわけで、そういう意味では自治体の情報と万博の情報が、同じシステムで動くことによってテレビ局にとっては簡便に情報の入手ができる形という仕組みをつくったわけです。その情報の共有化のシステムが TVCML ということでございます。

鷹野： TLML って何でしたっけ。

兄部： ごめんなさい、TVCML のリストという意味だけです。

鷹野： キーの部分のこと。

兄部： いや、TLML ってことは、TVCML・リスト・マークアップ・ランゲージという、これ自体は、そんな構造は持ってません。TVCML の記事を取得するための単なるリストとお考えください。この TVCML は万博用につくったものですから、要するに万博の情報にかなりシフトして、いろんなものをやったものですから、標準化、一般的に TVCML ってのはこうあるべきだという標準化、ガイドラインの策定の作業を、NHK も含めた放送事業者のワーキングで今、作業が進められているところです。できれば 10 月から、その標準化作業を終えて、自治体の方、放送事業者、場合によっては、さまざまな専門家も交えた、名古屋 TVCML 委員会みたいなものを立ち上げて、各地での活用の推進、それから新しい使い方があるだろうかという議論できればと話をしています。恐れていますのは、各地で TVCML の方言ができることです。別に名古屋が発祥の地という必要はないんですけども。それから課題として申し合わせているのは、災害 TVCML を策定したいということとして、このペーパーで兄部私見と書いてますのは、何が必要かっていうのは、関係者の方々に私の私見として申し上げたのがこういうことなんですけど、要するに災害 TVCML をつくるというけれども、じゃあ、どういう項目が必要なのか。それに項目の洗い出しをした上で、じゃあ情報構造をどういうふうなタグの中に収めていって、みんなが使いやすい形にするか。もう一つは、入力ツールというのは、ここのところが実は相当本当は大切なところで、災害情報 TVCML ってい

うのを自治体にやってもらうためには、とにかく入力をする人たちが、簡単に間違えることがなくできるツールをどう開発するかってのが、実は最大の問題じゃないかなと思ってます。TVCMLというのは、言うなればどういう情報をどの棚に置いておくかだけを決めるものですから、それをいろいろと各地で方言を勝手に作られると、西日本と東日本の電力の周波数のような、50 キロヘルツ、60 キロヘルツ、という違いはもうそろそろやめようよってのは執念のようなものでございまして、そういう意味で、どうこれから進めていくのがいいのかなっていうのが、さっきの TVCML 委員会の一つの目標になっております。また、サーバーの負担とかいろんなものを考えて、あるいは編集権というようなことも考えまして、今、情報そのものが、それぞれの事業者が取りに行くプル型に設計をしておりますが、災害情報はやっぱりプッシュ型のほうがいいのかなとか、プルでも、今、5分置きに取ってますから、それでいいのかなとか、こういうことも含めて議論をそれぞれ深めていく必要があるのかなと思っております。

TVCML を策定するにあたって、名古屋の放送事業者と万博協会が、実は覚え書きを交わしております。覚え書きといっても、何も、何の効力も無いんですが、いわば宣言のようなもので、ここにやっぱり書いてますのは、地域に有用な情報の流通に広く活用を希望すると明記をしております、放送事業者に提供しないことを前提としたり、理由無く一部の放送事業者を排除するようなシステムについては、われわれは同意をしないと取り決めていることを申し添えたいと思いません。

TVCML は、ざっとそんなところでお話を申し上げましたが、あと NHK として防災ツールをこれからどう考えてるかって、ちょっと違う観点のお話をさせていただきます。放送っていうのは、それぞれ存在理由はやっぱりあるんじゃないか。同報性ということが一つの強みであると思います。コストの面も含めて、一時に同じものを伝えるという機能は通信っていうのは不得意ですよ。輻輳、途絶をする可能性もあります。

<これ以降の話は説明が悪く、非常に分かりにくいので、ご了解をいただければ以下のように書き改めたいと思います>

災害・緊急時に頼りになるのは、やはり同報性を持つ放送だということになると思います。特にラジオは屋外でも、車の中でも聞けるという意味で、災害に強いメディアと言えますが、ひとつ弱みは、ラジオもテレビも流れていってしまう、つまり聞き逃し・見逃しという弱みがあることも事実です。データ放送は繰り返し確認できる、文字によって確認できる点で、その弱みをカバーすることができます。さまざまなソースから情報を集めてきて、データ放送でお伝えしていくことによって、新しい災害放送が生まれ出せると考えています。また来年 4 月からのスタートに備えて、今、私どもが取り組んでいる、地上デジタル放送の帯域の一

部を使って携帯向けに放送するワンセグサービスは、その新しい可能性の一つですし、地上デジタル受信ができる車載型のカーナビも発売されています。自治体のホームページを見れば、必要な情報は入手できるじゃないか、あるいは携帯のメールを使えばいいじゃないかという指摘もありますが、さまざまな方法で、ありとあらゆる手段で情報提供していくのが、ある意味では住民の安心・安全を確保していくことにつながるのではないかと考えています。

昨今 NHK では、効率的な運用ということが大きな課題になっていまして、少ない要員で、より迅速で正確な放送を出していくことが求められています。私も現場で働く者として、デジタル情報をどううまく活用するか、あるいはマルチコースをどう徹底するかというような工夫を一層進めて、多品種少量生産といえますか、多くのメディアで視聴者のニーズに応えるさまざまな情報をアウトプットしていく必要がある、そうした課題を解決する上で、TVCML という仕組みは、ある種の重要な核になっていくのではないかと考えております。

NHK の中で、私が今申し上げてるのは、とにかくやってみようということです。デジタル放送の技術っていうのは、まだまだ始まったばかりです。TVCML もとにかくやってみようよってことで始まり、万博でやってみた結果、そういうのをやってるらしいという皆さんの間の話題になって、少しずつ広がり始めています。<ここも分かりにくいので、以下のように書き直したいと思います>

最後にもう一つ申し上げたいのは、デジタル情報というのは、やり取りが簡便で加工や保管もしやすいという特性を生かす形で、フォーマットの共通化・情報の共有化の努力を進めていくことが大切なのではないかということです。技術や社会の進展で、いろんな分野で専門化と細分化、悪く言えば蛸壺化が進んでいると指摘されています。そうした社会の個別化の動きに対して、放送は「同報性」と共に、時を共にするという意味での「共時性」という機能を持ち合わせています。この放送とデジタル情報を併せ持った「デジタル放送」は、新たな地平を切り拓くことができるのではないかと考えています。敢えて難しい言い方をすれば、インテグレートッド・インテリジェンス、統合知という言い方を私は最近してるんですが、そういうものを志向していくことができるのではないかと、そのポイントはデジタル情報の共有化を進められるかどうかにかかっていると思います。放送と通信の連携ということが大きなテーマになっていきますように、われわれの仕事は、境目がなくなってきました。だんだんボーダーレスになってくってことは当然のことながら、縦横のシームもどんどん切れていくんだ、シームレスになっていくと思っております。きょうのような会に出させていただいて、勉強させていただくと同時に、いろんな方々と意見交換をさせていただくのは、非常にありがたい経験だと思っております。おおむね、私の話はそんなところです。

藤 吉： 質疑は、そのあとにしますか。

兄 部： どちらでも結構です。ザザザッと何かぶっ飛ばしちゃったり。

藤 吉： 何か、動くと忘れてしまうんで、忘れないうちに、何か質問ありますか。

鷹 野： よろしいですか。

兄 部： はい、どうぞ。

鷹 野： 結局、TVCML っていうのは、入力を一挙にして、それをいろいろなところで供用できるっていうか、活用できる仕組みというふうに理解して。

兄 部： そう考えていただければよろしいかと思えますし、私ども、その自治体のサーバーがどういう格好で動いているかを、実態をよく知らないものですから、今度、実は岐阜県がサーバー改修をやって、TVCML の吐き出しを考えるということですので、多分それがモデルケースになると思います。災害情報等については、入力システムもどう作るのか、使い勝手も含めた検討が必要だと思っています。県、自治体は、ほとんど XML のデータサーバーになってると思うんです。ですから本当のところは、入力システムというより、吐き出しのところだけ考えちゃえば、実はできるのかなと思ってるんですが。

水 上： 自治体、三重県の水上当と申します。

兄 部： 水上さん。

水 上： 兄部さん、東京に行っちゃったんで残念です。

兄 部： すみません。思います

水 上： 実際その裏側で XML 持ってるのって、多分ほとんどまだ無くて、本当に Web と DB ががちりくつついて、もうそんなのばかりだとね。そこから HTML だけ吐き出すみたいな。自慢するわけじゃないですけど、三重県以外で、まだ実は聞いたことがなくて。

兄 部： 三重県さんは、かなりおできになられると思います。本来は、そういうふうにしとかなないと、データベースとダイレクトにつないどくと、多分よくないですよ、多分ね。XML のサーバーをちゃんとつくっていただければ、あとは、そんなに吐き出しとしては難しくないと思ってるんですが。

水 上： あとはまあ、それを誰が TVCML にするかっていう。

兄 部： というところですね。

水 上： ちょっと、数百万とかあればできるんであれば、もう、じゃあ三重県もお金出しますよって話なんですけど、それが、もしかしたら今後、自治体ともめてしまおう、費用分界か責任分界っていうの、どこに設けるかみたいな、何かどうでもいいような手続きみたいな話で、だいたいちょっと紛糾してしまう、やることは、みんないいって思うんですけど、そういう細かいところでもめてしまおう。

兄 部： そうですね。コストをどうするかという問題がありますね。岐阜県さんは、情報推進という梶原前知事からの方針でやるとお決めになったので、岐阜県さんが県レベルでは、一つのひな形になろうかなと思います。また三重県さんは Web 関

係含めて、非常に整理がきちんできて、自治体の入力装置も、かなり開発をしてらっしゃるようですが、実際に、じゃあどこまで動くかっていうことがこれからの課題になると思います。やっぱり放送事業者も含めて、関係者がある種ちゃんと話を決めていくと、別の動きができるかなと考えています。その一つの試みが TVCML できて、万博でとりあえず一つやって、これは第1ステップで、今度、災害 TVCML で第2ステップに行くと、それが固まってくると、全国にご理解いただく第3ステップにつながっていくのかなと考えています。まだまだ TVCML っていうものが、皆さん、藤吉さんも、もうできているそうだとおっしゃってますけど、まだまだ途上で、感じて申しますと、ようやく幼稚園に入って、小学校に進むめどが出てきたかなっていうような、そういうふうなところでございます。

天 野： 質問していいですか。災害 TVCML って、災害って頭に付けられていますが、いわゆる XML だとか BML だとか、そういうのって単なる文法の決まりじゃないですか。災害って付くっていうことは、かなり分析をして。

兄 部： そうですね。今後いろいろな分野の方に加わって頂いて議論し、整理検討をする必要があると思います。実は今、今年の9月1日に、簡易の災害 TVCML で、放送事業者と瀬戸市含めた2、3市が、9月1日に災害 TVCML を投げて、やりとりする実験をやったんです。総務省の消防庁の報告フォーマットがあるんですね、あれに落とし込んで、どういう項目を情報として必要かっていうふうに整理をしてみますと、実は各自治体に求めているのは、避難所というところしか報告を求めてないんです。ところがわれわれ放送事業者は、個所数なんか知らない。住民にお伝えしたいのは、どこの避難所が開いているかということです。病院は、何カ所やってるんじゃない。つまりそういうデータの中身そのものを1回きちんと洗い出す必要があると思います。給水ポイントはどこか、それから市民の相談所はどこか、そういう情報を被災者の皆さんは必要としていると思います。はっきり申しますと、消防庁のリストは、お役所が下々の者の被害の状況を知るために集めているだけであって、それを市民にどういうふうに伝えるかっていう観点では、情報は集めてないというふうに思うんです。ですから、そういう意味で、市民の方々に必要な情報をどう集めて、それを情報構造として、どう表現していくかっていう整理の仕方が要るんですね。またタグの処理についても、議論の余地があります。例えば避難所の情報の TVCML を例にとって見ますと、A市の開設されている避難所のすべての情報を一つの TVCML の記事としてまとめて表記をするか、それとも A市の避難所の最新の情報を差分の形で投げる格好にするのか、議論が分かれるところです。情報の処理としては、そうしたことをきちんと決めておかなきゃいけないことなんだと思うんです。またタイムスタンプをどういうふうに付けるかなど、自動的にデータをやり取りしようとする、という

ことを、きちんと情報構造として決めないきゃいけないんです。そこら辺があいまいだと、何をやっても結局うまくいかないということになると思います。TVCML って決して難しいことじゃなくて、どういうタグに何を書いて、どういうふうに入れていくっていう、そういうルール作りの問題として、理解して頂ければと思います。

小 田： 兄部さんね、確かにそのとおりなんですよね。問題は、自治体も大小強弱が、まちまちですよね。どっかがやっぱりね、統一フォーマットというのかな、それをつくってあげなくちゃいけない。これに基づいて、今おっしゃるとおりですよ、個所数じゃないよとかね、具体的な避難場所、名前が必要なんだよっていうことになるとですね、そういった様式、フォーマットってのは、どこが提示すべきなんだろう。

兄 部： そうですね。

小 田： それ例えば、午後からその話をしようと思ってますけれども、新潟県で例の避難準備情報を出すときにバラバラだったのね。これは困るというのを放送事業者のほうから言って、県が動きました。県が間に入って、じゃあ統一フォーマットつくろうじゃないかということで、一応つくって、それを市町村に流した。その後の大雨のときに、そういった、その統一フォーマットにのっかって、まだ手書きなんだけどもね、手書きでもってファックスが送られてくるようになった。これは一つの進歩だと思うんですね。おっしゃるように、それがまず前提。そうじゃなかったら、とてもじゃないけど、サーバーにいろんなものが入ってきて、使えない、たくさん情報はあるけど、それ取り出せないってことになりますよね。愛知県の場合は、そこはどういうふうになっているんですか。

兄 部： TVCML の策定に関しては、名古屋市や瀬戸市、豊田市が中心になって進めておられる「愛知県地域情報プラットフォーム研究会」というのが、すでにつくられておりますから、ここで放送事業者含めて、10月から策定をやるということでもう段取りが始まっています。私どもご協力しながら、どこまでやれるか分かりませんが、小田さんおっしゃったようなものを、ひな形として皆さんにご提示してみようと。提示をしてみた上で、もっとこうやってやったほうがいいんじゃないっていうところは、どんどん、ある種、変えていけばいいなと思っております。

鷹 野： 今のお話は、標準化をどういうふうに進めていくかということに、結果的になると思うんですね。一つのやり方は、トップダウン的に、国がどっかでそういうものを、委員会でもつくってやるっていう方法ですが、今やろうとしているのはそうじゃなくて、むしろ地方から出していこう。これはぜひ、そっちのほうの方が面白いし、重要だと思うんですね。一つは、そのときにスタンダードは、一度作ったら終わりっていうことはあり得ないんで、やっぱり継続的に改版するって

う組織をつくっておかなくちゃいけないと思うんですね。そういう委員会で1回オーソライズして、新しい改版を出しましょうっていうような流れをつくれればいい。

兄 部： そうです。全国組織ではD-pa(社団法人 地上デジタル放送推進協会)とかいろんな組織があるんですが、なかなかうまくはまらないので、とりあえず名古屋で専門家委員会を立ち上げましょうと。ここをとにかく一つ仕切って、うまくそれが東京に導入されればもっといいし、1、2年、名古屋で、名古屋弁がどこまで標準化になるかっていうのをやってみましょうかということです。結構大変なんですけども、少しずつそうやって前に行くかな。一挙に、おっしゃるように、ドーンとなかなか前に行かないもんですから、少しずつ一歩ずつ地方から、東京に少しずつご理解をいただくような格好にしていくのかなと思っております。

鷹 野： NHK さんだったら、できるんじゃないですかね、その辺は。

兄 部： たまたまと言いますか、たまたま名古屋にいた私が、今、マルチメディア局のデータ放送の開発担当になってるわけで、名古屋の皆さんにとってみると、おまえちゃんと働けよっていうことでしょう。全国に広げるのは、おまえの仕事だからっていうふうに言われた部分もありますし、総務省の方々も含めて、いろんなご理解を少しずつ得られておりますので、こういう会も含めて、ご理解していただく方が広がっていけば、もうちょっといいものになるかなと思っております。

水 上： ちょっと、さっきの兄部さんの発言で、ちょっと疑問だったのが、われわれも、詳細な情報はちゃんと情報は出せるし出したんですけど、通常、集計したものを求めるのは誰かというマスコミです。

兄 部： ですね。特にNHKが問題です。

水 上： NHKというよりも、新聞系ですね。何か、何地区何人避難してるんだとか、結局は、実は実際われわれは、国への報告のために集めているというよりも、マスコミのために集計をかけるみたいなものにして、その辺だけは少しご理解をお願いします。

兄 部： 分かりました。すみません。

水 上： 愛知県で動きを進められるのは、とてもいいと思うんですけど、実はデジタル放送となると、情報系の部局がよく呼び出されるみたいなんですけど、実は彼らって、ほとんど何も知らないの、多分ケンカになったっていうのもよく分かるんですよ。なんで、やるんなら多分広報か防災か、で多分うまくまとめてくといいいのかなと思います。情報部局って結局、情報部局って言うだけであって、実際にじゃあ防災の情報も情報部局がやってるのかって、やってないか、何も関与してないので、むしろ混乱を招くというか、わけの分からない方向に行ってしまうかもしれません。その辺は、ちょっとご注意されたほうがいいかと思うんです。

兄 部： 例えば、簡単に申しますと、実は私どもの感じでいうと、三者いろいろやってくと、防災の部局にお話をするのが一番いいんですが、防災の部局だけにお話をしていると、普段使っているところ、つまり3年に一遍か5年に一遍っていうことになりかねないってところがございまして、できれば広報と防災は一緒に議論をしてもらいたいんです。これはおっしゃるとおりなんです。ところが広報も防災も、はっきり申し上げてお金をお持ちじゃない。防災がお持ちのところも、三重県はかなりお持ちですけども、情報の基盤整備、インフラとか、サーバーを何とかしなきゃいけないっていうお金を持つてるのは、情報の人たちなんです。やっぱり情報基盤のところを動かして、サーバーの作り替えをさせて、それから専用線の張り替えをしてもらってって、いろんなことをしなきゃいけない。そうすると、やっぱり情報が動かないと、広報と防災だけではやっぱり無理で、防災と広報と情報の3者が連携し、かつ知事部局がそれをサポートしてくれるっていうのが実は一番いい形なんです。そこ私どもも考えどころだと思っています。

水 上： あと、実は関西でも同じような動きが出て、ちょっと TVCML って話題も少し出ています。

兄 部： 分かりました。

水 上： 万博みたいなイベントがあれば、動いてたと思うんです。そういうのがないので、やっと今、鉄道会社も含めながら、ライフラインと鉄道、自治体含めて、この災害時の情報共有みたいな話が、ちょっとずつ今、出てますので。

兄 部： 関西広域協議会ですね。芝先生を中心にした動きですね。

水 上： はい、そうです。

兄 部： 私は直接はお目にかかってませんが、そういう動きがあるということ、かなり伺っております。ただ問題は関西の場合は、放送事業者がきちんと連携できていないような感じがあります。放送事業者側がきちっとくっつかないと、できたものの外に出ていけないってことになりかねないので、そこらへんは私どもも連携しながらと思ってます。

水 上： 三重県としては、関西の動きを暖かく見守っていますので。

兄 部： ですから、いろんな開発っていうふうに申しましたが、実はおっしゃるように、私鉄に関しても、鉄道情報も実は TVCML で表現すれば、みんなが真ん中に置いて取りに行けばいいですし、道路情報もそう思いますし、考え方はいろいろありうると思っています。TVCML がすべてだと思いませんけども、そういう仕組みは、皆さん結構ご賛同、悪くないんじゃないっていうふうな話になってますので、そこをどううまく広げて可能性を開発していくかっていうのが、もう一つの課題かなというふうに思っております。

神 吉： すみません。アジア航測の神吉ですけど、三重県でそういうのつくったときに、いろいろやってたんですけど、多分その TVCML っていうのをつくって、その形

で出してくれって言われると、多分いろんなベンダーがいろんなシステムを開発してるんで、なかなかその形式に出すって手間がかかるから嫌だっというところ多いと思うんですけど。三重県なんかは、三重県が作った XML なんて、勝手に取ってってもらって、自分たちの使いたい形に、XML なんてパーサーかけて変換してくれればいいんじゃないっていうような発想は持ってるんですけど、何かそういうのがすんなりいくのかと思うのですが。

兄 部： 三重県さん側だと、みんなそうなんです、NHK 側で言うと、全部の方言を、うち読まなきゃいけないのってことになるんですね。そうやって、おれんところ勝手にやってるから、勝手に持ってきちゃいいじゃないかと言い出したら、この話は何にも無くなっちゃうと思うんですよ。むしろ、自分のところで持ってるものを、こういうものが必要なのでって大きな広場に出していこう。ですから、吐き出しのところさえうまくやっていただければ、それは三重県のサーバーなのか、あるいは三重県の外に置くサーバーなのか、ちょっとそれは議論が分かれるところかもしれませんが、情報の共有化というのは、そう考えないと成立しないんじゃないかと思いますが。

神 吉： 難しいですね。その多分、NHK さんの立場だったらやっぱりそういう形を出してきてよっていうのは、多分私が NHK だったらそう思います。

兄 部： NHK っていうだけじゃなくて、多分、そのほうがみんなが使いやすいですか。例えばファックスサービスをしている NTT さんにしても、その他いろんな方々にしても、自治体の情報っていうのがなぜ使われないかという、情報の提供の仕方が統一されていないからじゃないでしょうか。自分のとこで文章にしてため込んで、なおかつ課ごとによって書式が違って、縦割りのシステムをどんどん推進していたら情報は外に出ていきませんよ。だからやっぱりオープンにどうやったらできるかっていうふうにシステムをつくらなきゃいけないし、それからもう一つは、ものすごくそこは大変なんだと思うんですけども、単年度予算の中でサーバーを切り刻んでつくっちゃうから、縦割りシステムばかりで横に全然広がっていないシステムばかりではないかと思います。多分、それぞれの県の中のシステムで、横断的に情報を共有しているという例は、ほとんど無いんじゃないかと、いろんな方々の話を聞いてると感じます。

水 上： 無いですね。

兄 部： ですね。だから逆に言うと、県庁の中や市町村の中でまず抜本的に自分のところで情報共有しなさいよ、それを外に出せるようにすれば、情報の共有は飛躍的に進むのじゃないかというのが、基本的な考え方ですかね。ですから現在の情報の持ち方を全面的に肯定したまま情報の共有を進めようとしても、限界がある、掛け声だけに終わる恐れがあると思います。

神 吉： 今、動きとしては、国で消防庁さんとか内閣府さんでも同じような構想を出

して、同じような XML をつくって、みんなでそれ出してねみたいな動きが。

兄 部： ありますよね。

神 吉： あちこちであって、それを何かいろんな団体が、あちこちでやられると、出す自治体としては、大変な負担になるのではないかと思います。

兄 部： そうです。おっしゃるとおりです。

水 上： 誰が方言を理解するという問題がありますね。われわれが、結局いろんな言語の人、英語の人とフランス語の人とポルトガル語の人に出さなきゃいけないのか、NHK さんがそれを全部翻訳するか、どっちかになってしまふんで。

神 吉： デファクトスタンダードにしまおうということですね。

兄 部： そうです。いま名古屋で TVCML の策定に関わっている方々はそこに行くために、必死になってるっていう感じです。デファクトスタンダードにしないと、本当につらいんだと思いますよ。みんなが大変で。

小 田： それでね、そのためにも、言い方ちょっとおかしいんですけども、災いを転じて福とし得るのが一番なんだろうと思うんだね。具体的に一つ災害を経験すると。そのときに、こういう情報が欲しかったねと。その情報ってのは、例えば自治体から出し得たんだろうかと。さらに出すとすれば、どういうシステムで出てくるのかと。実は私たちが、新潟に行って放送や行政の関係者に聞き取りをしたねらいはそこにあるんですよ。去年の水害と地震のときに、もちろんまだ、データ放送も何もなかった。けども、もし地上デジタルというものがスタートしていたら、どんなことができるだろうかと。一応、そのシミュレーションだけでもしてみよう、どんなことが考えられるだろうかと、ということでヒアリングをしたわけです。その内容についてはともかくとして、例えば、さっきから非常に問題になっている二点、どうなのかなっていう気がするの、一つは、おっしゃるように例えば県の中でセクショナリズム、蛸壺入っちゃったようなものだから、横にくし刺しにした情報ってのは、なかなか出てこないということでしたね。しかし最近では例えば、どの県も全部ホームページを持っていて、そこには一応、ある程度標準化された情報が掲載されてるわけですよ。これが一つのきっかけ、取り組みのきっかけになるのかなという感じですね。

兄 部： そうですね。

小 田： 新潟県で聞いた話だけれども、中越地震のときにとにかく情報が来ない。そこで市町村から来る情報、どんどんホームページに載せていった。スクリーニングは全くやらずに、中に間違った情報があったようだけれども、初動段階で非常に効果があったということ、県庁で聞きました。これなんか、一つの方法なんだろうかと。少なくとも、そのホームページに掲載するということは、入力がどこかの段階でデジタル化されているわけだから、それは地上デジタルで、例えばデータ放送だとか 1 セグだとか、そういうところへの転用も技術的には可能でしょ

うね、十分ね。

兄 部： できますね。

小 田： 具体的にどうするかというのは、また別の問題としてね、そのことが一つ。それからもう一つは、さっきのお話のように、例えば量的に把握をしなくちゃいけない。特に新聞社なんか、そういうような要請が強いんだと、これは確かにあると思う。ただこの話はね、95年の阪神大震災のときに、一応、粉碎したはずなんだ、僕らがね。どういうことかということ、それまでは、ニュースなんかでは、例えば何々などいくつの路線は止まっているというふうにまとめた数値を出して事足りりというところがあった。しかし、あれだけの大規模の災害になってくると人々に必要な生活情報というのは個別、網羅、具体的、局所的でなくてはいけない。それまでの、「などいくつ」ではなくて、全部出せ、ということを書いて、その当時合意されたはずなんです。だから少なくとも、しかも市町村段階では、例えば、何カ所に避難所を開設しますなんていう情報は、絶対、住民に出さないんですよ。どこの小学校、どこの公民館、全部出すんだから。それがそのまま伝わってくればいいわけでしょ。県のサーバーに入るようにすればいいだけであってね。これは意識の問題。それに対して、メディアのほうも、同じようなレベルの意識を持って取り組んでいけば、その話はある程度クリアできるのかなっていう気がするんだけど、どうですか。

水 上： 個別、網羅、具体的に出したのにかかわらず、いや足し算が面倒くさいから聞いてくるんですよ。

兄 部： おまえら、自分で足せて。

水 上： そうそう。つまりその名古屋地区でも、ものすごく最高の人もいれば、こういう何か、たわけた、たわけなんて言っちゃいますけども、たわけな記者もたくさんみえるので、足し算ぐらいしろよみたいな。

兄 部： ありますね。

水 上： そのとき実は現場は、そういう非常に低レベルのせめぎ合いで、はい。

兄 部： おっしゃるとおりですが、私も名古屋で一応取材、テレビニュースのほうの仕事してましたから、申し訳ないんですが、たわけは確かにどこもおりまして、ただその情報のアウトプットっていうところで、もう一つ何て言うんでしょうか、記者発表みたいなものが、どうやったらできるのかっていう部分は、もう少し考える余地があると思います。実は避難勧告とか避難指示についてメールで必ず来るならば、行政側も放送局も随分負担の軽減になるんじゃないかと思います。今、NHKでは、記者が台風のときに、それぞれの市町に、避難勧告、いつ、どこどこ出てますかといちいち電話で問い合わせています。僕から言わすと、極めて無駄なことをやってるわけで、ところが市町村は待ってたら、絶対ファックス送ってくれないです。

水 上： さっき兄部さんが、一つ、インターフェイスがうまくできれば、ほとんどできたと一緒に、そこなんです、やっぱり。だから電話のようなインターフェイス、電話の1から10のボタンみたいなんでピッピッてやれば、別に市町村の担当者が多忙といえども、それぐらいのことできるんで、そういったシステムが広がれば、避難勧告とかもだから、入力した瞬間にテロップでバーって出る。そういうことができると思うんです。

兄 部： だから、そのインターフェイスをうまくできればと思ってるんですが、実際問題、でもそこがなかなか大変なので、それも TVCML の、つくろうという一つの狙いです。避難勧告だけでも、ピッと押したらピッと出ていけばいいわけで、それを自動取得してデータ放送に出していけばいい。目指しているのは、今市町村に電話をかけている記者を、言葉は悪いですが出し抜くことです。電話をかけている記者は、もっと災害の全体像を調べたり、これからどうなっていくかといった予測にシフトしていくほうが、災害報道のレベルの向上につながっていくと思います。

(場所を移動して実演説明 以下、主な会話の概要のみ)

小 田： この画面は万博協会のほうが作るの。

兄 部： 画面はNHKが作ります。各社とも全部違います。データが飛んでくるだけで、加工するのはわれわれ編集権の問題です。どの項目をどう出すかというのもわれわれの編集権の問題です。放送丸ごとお渡しするというものではありません。

小 田： データが自動的に入ってきてこういう画面が作られるということですか。

兄 部： 基本的に運行情報とか入場者とかそういうこちらのデータは自動生成しています。判断が伴うものは編集をして出さないと出ない仕組みにしています。

天 野： どこの局を見ても情報の中身が同じだということでもいいのですか。

兄 部： 数値系のはチェックのしようがない。県の情報とか市の情報を流す場合も、送出の最後のボタンはNHKが押すと申し上げています。自治体からスルーで放送を出せるという点だけが強調されますと、放送に出す前にデータ放送の画面を送ってくれと、下手をすると事前検閲になりかねない要望があったりするけれども、そこがある種フォーマットのいいところで、ややこしいことをしなくてもお互い大体想定できる。放送局の責任においてどうしても曲げられない。

小 田： 相当なマンパワーが要るんでは。

兄 部： 私、愛知万博の期間中、連休中を含めて、一ヶ月に二日以上休めたことがあります。

ません、4人くらいで。災害の時は8人くらいで三交代で三日、そこで応援に来てもらえないとやれません。ちょっと大変なことです。やっぱり、制作運用体制なんですね。そして、使命に対する意識と。

鷹 野： データ放送のインタラクティブなメニュー選択操作はどういう仕組みなのか。

兄 部： メニューで選択されるデータを全部落としています1回1回。基本的に8秒に1回程度新しいデータを読み込む仕掛けで、地上波では1.7Mbpsの狭い帯域で常に降らしていますので、インターネットとは違って、古いデータは持っていません。持っているのは最新のデータだけです。情報量も限られています。放送は流しそうめん、これは回転寿司のようなものです。テレビは同報性と個別性を両方持ちうる可能性があると宣伝しているんですが。

藤 吉： インターネットに勝てない、そういう印象を受けたんですが。

兄 部： 情報量ではインターネットには勝てないと思いますが、今、BSでやってる株のようにおじいちゃんおばあちゃんのデジタルデバイドの解消になる。送れるデータ量、スピードはネックになるが、放送は輻輳などがなく、何があっても降らせるから強い。例えば、カーナビは今通信を使ってその都度情報を読みに行っているが、トラフィック量が多すぎてサーバー管理が大変になってきており、放送と連携できればよいという声強い。放送と通信は、そろそろ敵ではなく棲み分けをちゃんとしてパートナーシップを組む関係が作れるか、というのが私どもの課題だと思っている。

(場所復帰 以上、ポイントの会話のみ)

兄 部： さっき申し上げた、あれはTLMLというのは、TVCM・リスト・マークアップ・ランゲージということだけにしか意味はないです。

鷹 野： TVCMLの一つ一つの、いわゆるコンテンツのリストを作っているんですね。

兄 部： そうです、それがTLMLってそれだけなんです。ツリーの中の一番上部に立っていて、それを読み込んでいくと。だからTLMLを読めば、どれとどれが必要かっていうのがわかりますよ。そこだけです。TVCMLっていう情報構造を、ある種統括するものが無いと、最新データとかいろんなものが表記できないんで、それがTLMLの意味です。ステータスをどうやって確認するかっていうところに、工夫があったといえます。

天 野： 実際には、何とかビルダーみたいな感じのものはあるのか、これいちいちテキストで書いていくんですか。

兄 部： ビルダーっていうか入力装置ですね。入力装置はもう、もちろんもう作ってあ

ります。

天 野： 作ってあるわけですね。じゃあ、普通の人じゃあ扱える。

兄 部： 普通の人が入力すればできるようにはなってます、はい。そこを含めて標準化しないと、入力装置もまた標準化できないというところでした。

水 上： 入力装置は結構いろんなものでいいかなと思いますけど。裏側でちゃんと XML を吐き出してくれば。

兄 部： そうそう、逆に言うと入力装置って、おっしゃるように何でもいいんですが、役所で使っているいろいろなシステムの入力装置は、難しすぎるんですよね。あの入力装置をもうちょっとお手軽に作ってあげられないかなと思うんですよね。

水 上： 必須入力項目とかあると、あんまりありすぎると、今度は送る側がこの項目は何だろうとか、もっと早く送りたいのに入力が複雑すぎるとか、そういういろんなジレンマを経験してまいりました。

兄 部： なるほどね。そうですね。そこら辺も、多分、水上さんのような経験をお持ちの方って、そんなにたくさん多分自治体の中にいらっしやなくて、情報のシステムをやっている、なおかつ入力システムを考えてる人って、多分日本の中でも 30 人とか 40 人くらいしかいらっしやらないと思うんですよ。そういう方々がもうちょっと発言力を持つと、いろんなこともうちょっとできるかなと思ったりもしますが。

天 野： 入力と出力の関係なんですけど、出力は放送事業者のほうでチョイスしながら好きなようにつくるといった話だったのですが、いらぬものまで入力させられたほうはかなわないので、結局アウトプットのイメージをある程度描きながら、いるものは何かという入力の話になるだろうと。

兄 部： ですから、災害情報のところについては、そういう議論をさせていただきたいというふうに思っているのですが、いや、本質的に申しますと、自治体がお持ちの情報を出していただければ、実は私どもはいいわけです。とりあえず、災害情報のところで入り口と出口があるかもしれませんが、自治体には、縦横斜めをパイプを作ると、埋もれている情報がいっぱいあると思うんですよね。売る情報はいっぱいあるのに出てこないだけだというふうに私は思ってます、皆さん何ていうか、全部いちいち個別に情報を出さなきゃいけないと思っているので、面倒だよということになるのですが、ここにあるものここにあるものここにあるものをくっつけて、ピッて出せるっていう仕組みさえお作りになれば、あなたの方がもっと楽になるじゃないですかと思うんですよ。フォーマットっていうのは、そういう簡単なことをきちんと整理して決めればできるんじゃないですかって言うてるんですが。だから入力については、あんまり無駄なことは、おっしゃるようにいらぬと思いますが、XML データをベースにしようという発想は、放送事業者だけじゃなくて、XML 共通サーバーのような大きな広場があると、みんな

なが使えるじゃないか、ということです。だから、TVCMLの仕様はできるだけ公開しよう、だけど方言をいっばいつくると今度は何が何だか分からないから、基本のデータのやり取りの形はこういう形にしましょう、というのが、TVCMLの考え方です。

鷹野： 図で、その一番複雑で細かい図がありますよね。あの図はぜひ、ほしいなと思って。愛知万博。

兄部： 愛知万博、はいはい、分かりました。でかいやつ。

鷹野： あの中に今の一つのポイントでもある、結局だから、だれがどう使うかというのは、この情報はこっちで使うかもしれないけども、これはこっちで使うかもしれない。それをどういうふうに入れさせるかっていうのが、一つのポイントかなっていう気がするんですけども。確かに。だから使いもしないものを入れるのはバカらしいけども、この情報はNHKは流さないかもしれないけども、こっちのほうで何か使うかもしれないとか、自治体の中で情報公開に使うかもしれない、というのはやっぱり入れるでしょうね、きっと。それをどういう、あとは入力の手間で、最終的にデータベースに全部その中に入っていると便利ですよっていう話だと思うんですよ。

藤吉： さっきの水上さんの、数勘定くらい自分でやれよっていう話は解決するんですかね、それでやると。

水上： 解決しないですね。そこがひとつ解決すると、つまり、弱いところを補強すると、次の弱いところが壊れたりして、そうするとまた違う何かが出てくるというか、絶対出てくるはずですね。だから、やっぱりその住民に伝えたいっていう、報道機関がやってくれることと、あとは彼らはやっぱりビジネスとしての報道する部分って多分あって、その辺が、まあわれわれとして住民にここだけ伝えてもらえばいいんだけど、要は彼らもやっぱりネタとしてもっと詳しく出したい、ほかよりも出したいみたいところで、われわれの負担が増えてしまうのはナンセンスなんです。

兄部： そこはありますね。

水上： はい。前、小田先生がおっしゃったシビルミニマムって言葉、ずっと覚えてるんですけども、それはわれわれやりますよと。それ以上は、もうだから要は皆さんのビジネスの話ですよ。なので、逆に言えば僕らはもうそれ以外にお付き合いできませんって言い切れるかなって思うんですけど。

小田： 今は言い切れるんじゃないかしら。要するに何のために記者はいるのかという問題。さっきの兄部さんの話じゃないけど、記者が電話でもっていろいろと自治体の担当者に聞くということ自体がね、あまり意味が無いんですよ。記者の仕事は、実際に被災地へ行って取材してくる。それが本来の役割なのだけれど、現実はそのもっと手前のところで、特に初動段階で随分と記者のマンパワーが使われ

ているでしょう。

水 上： われわれのマンパワーも使われてしまうんです。

大 西： 一つ伺っていいですか。「方言版」のお話、さっきから再三出ているのですけれども、これはどういう意味ですか。つまり災害情報を伝えるときに、各県それぞれ独自の方式でやるというのを「方言版」と言ってるのですか。

兄 部： そうです、そういうことです。

大 西： そういうことですか。なるほど、分かりました。

兄 部： ですから、書いてあることが同じなら、順番は同じにね。どこにどういうふう
に何を書くっていうのをあらかじめ決めたルールに従ってデータを置いておくとい
うことなんです。それを、さっき、申し上げたように自分のところのデータの出
し方は変えない、あるいはこちらの方が自分達の都合がいいデータの置き方だ
から、というような、みんながアウトプットの方言を始めると、何のために共通
化しようとしているか分からなくなってしまう。情報の集め方や業務の所管
の方法は各都道府県によってそれぞれ異なると思いますし、サーバの設定の方法
も違うでしょう。しかしアウトプットの方法は、何とか情報の出し方は一つにし
ましようっていうことなんです。

藤 吉： それでは、よろしいでしょうか。

兄 部： 何か、段取りが悪くて申し訳ございませんでした。

藤 吉： いえいえ、会議室まで提供していただいて、ありがとうございました。午後か
らは、新潟とそれから三重の現地調査報告をやります。どうも有り難うございま
した。

< 以上 >